

HAIKAI 其角研究

詩あきんど

創刊号

2012年9月1日発行

【二上俳諧塾を始めるの弁】

勉強好き・其角好きの人・集まれ・

かれこれ平成元年以来、わたくしは江戸の俳諧師・宝井其角の俳諧を読み解こうと、連句、俳句の実作に志して来ました。

そこで判って来たことは「其角を解することの出来ないもの仮令再讀三讀しても遂に解し得まい」と、富永半次郎という方が述べていた事です。

確かに、其角の真価である「冗談抜きの洒落」を、或る者は只の珍奇だと言ひ嫌い、他方、その「奇」をリスベクトし珍重する者がいます。其角に何か在るとは誰しも思いつつも、その何かが定かには分からず、わたくしなりに「其角十講」と題して、『詩あきんど』を創刊して、綴ってみようと考えております。

其角についてほとんど知らない読者の為に、市販されている本を紹介して置きますので、参考にして下さい。

幸田露伴「芭蕉と其角」(『露伴全集』岩波文庫)。「其角」(『芭蕉門名家句選(上)』堀切実編注。岩波文庫)。石川淳「其角」(『江戸文学掌記』講談社文芸文庫)。加藤郁乎「隣人其角」(『江戸俳諧にしひがし』みすず書房)。今泉準一「其角と芭蕉と」(春秋社)。田中善信著「宝井其角」(新典社)。石川八朗・今泉準一・鈴木勝忠・波平八郎・古相正美共編「宝井其角全集」(勉誠社)。

いっぽう連句は、協話の詩という世界に類例の無い日本民族固有の文芸であり、俳句は日本の風土の季の移るいによって生みだされた日本語の質感(クオリア)にもとづいた短詩であります。柿本人麻呂は「事霊の佑はふ國」と万葉集の歌に詠んでおりますが、俳文芸の起源をたどれば、漢字伝来よりも昔の上古の日本語四十八音の韻律の世界へ溯らねばならず、そこに後代人の俳味(フモール・イロニー・自嘲・不調和の調和等)の加わった詩が、連句・俳句だと考えられます。

其角が『みなし栗』という題を選んだのは、自らを栗ノ本衆の系譜に位置づけたからで、今日のわたくし共も、連句・俳句の起源が、柿ノ本衆の和歌と栗ノ本衆の俳諧との交叉にある点を意識せねばならないでしょう。

元々自身の愉しみと向上の資として読んで来た其角に過ぎませんが、これ迄に二上が先人より学び得た〈其角〉と〈俳諧〉というジャンルを、どうやら次世代へ伝えねばならない番が回ってきたようです。わたくしはアカデミズムにもジャーナリズムにも属しておりませんので、どこにも何も遺さずも一考と思っておりますが、媚びを売らず、何人の協力も求めず、二上俳諧塾を始めることにした次第です。『詩あきんど』号は、購読会員・実作会員になって頂いた方へ、隔月刊で郵送致します。先ずは創刊号をお送り致しました。(平成二十四年八月十五日)

【其角十講】（目次）

- 一 〈自筆年譜について〉 寛文元年七月十七日生まれ
資料『其角十七回』所収「自筆年譜」
- 二 〈俳諧師へ〉 延宝三年（十五歳）
資料『桃青門弟独吟廿歌仙』『田舎之句合』『板東太郎』
- 三 〈自選俳諧集虚栗刊行〉 天和元年（二十一歳）
資料『むさしぶり』所収「樽つた」『虚栗』
- 四 〈上京への旅〉 貞享元年（二十四歳）
資料『新山家』『続虚栗』『花摘』
- 五 〈二回目の上京への旅〉 元禄元年（二十八歳）
資料『いつを昔』『雑談集』
- 六 〈三回目の上京への旅〉 元禄七年（三十四歳）
資料『秋の露』『枯尾華・芭蕉翁終焉記』『句兄弟』
- 七 〈名文早船の記成る〉 元禄十三年（四十歳）
資料『三上吟』『焦尾琴』所収「早船の記」
『類柑子文集』所収「松の塵」「北の窓」
- 八 〈其角死す〉 宝永元年（四十四歳）
宝永四年二月晦日没（四十七歳）
資料『類柑子文集』所収「いなつかの灯」「晋子終焉記」
『五元集』秋色編『石なとり』

九 〈其角ばなしと芭蕉其角譚〉 其角没後

資料『近世奇跡考』『俳家奇人談』『勝峰晋風編』『其角全集』
十 〈富永半次郎の其角論〉 戦後
資料 富永半次郎『正覚に就いて』今泉準一『五元集の研究』

【創刊号目次】

- 002 二上俳諧塾を始めるの弁
 - 003 其角十講のもくじ
 - 004 其角十講の一
 - 005 自筆年譜について
 - 006 俳諧試論第一回
 - 007 非自他場の勧め
 - 008 其角自筆年譜
 - 009 「自筆年譜」についての疑問点
 - 010 詩あきんど集 道俠 千恵 左京 初江
 - 011 由佳利 浅風 麗風 柚果 良文
 - 012 美琳 碧子 風純 朋々 波流
 - 013 佳月 リ工 建穂 貴夫
 - 014 批評
 - 015 本誌の題名について
 - 016 会員案内 公開講座案内
- ◇次号案内◇（二〇二二年十一月一日刊行予定 其角十講の二）俳諧師へ／無常観について／俳諧試論第二回「十二句連句の勧め」／連句実作作品／「詩あきんど集」／創刊号よりの抽出句抄／

【其角十講——自筆年譜について】

其角研究のはじめは、其角「自筆年譜」から始まる。

「自筆年譜」を読み解くにいろいろなる事が分かるが、ここでは十六歳（延宝四年）の其角を解説してみよう。

「草刈三越講筈」とあるのは、江戸で開業していた三越の講義に列して医学を学んだの意。草刈三越は羽州の人で、延宝七年に『医教正意四巻』を刊行している。

其角が学んでいた医学は中国の陰陽五行説を背景にした易医というもので、「自筆年譜」によれば、十四歳「本草綱目写 修治 主治 發明」と記し、十五歳「内経素本 易経素本写」と記しているので、中国本草学の薬学書『本草綱目』、中国最古の医学書『黄帝内経』、古代中国の哲学書『周易』を白文で筆写したという。草刈三越の講筈に列したのは、おそらくひとつの資格を得る仕上げではなかったのかと思う。

十六歳当時の其角は、父東順に従って家業の医を継ごうとしていたのだと思う。しかし「河豚汁に又本草の咄かな」との句があるように、後には医学への関心を失ってしまう。江戸にはまだ蘭学が入って来ていなかった。もし蘭学を学ぶ機会があったなら、その生涯は異なったものになっていたかも知れない。

「服部平助講述」とは、個人的に若しくは数人の小人数で論語一巻の訓と解義の講述を受けたの意だろうと思う。

もし「平助」が服部寛斎（一六六七～一七二二）の幼名とするならば、一六六一年生まれの其角より六つ年下という事になる。とすると平助は十一歳。其角研究の大家・今泉準一氏は、従って平助は別人と考えられる（勉誠社版『其角全集』「年譜編」）と解されているが、この説は疑問だと思う。今日では十一歳は小学五、六年生だが、学校制度の無い江戸時代では、学者の家に生まれれば幼いときから家督を継ぐために漢文を習っており、十一歳の服部寛斎が十六歳の其角に論語を講述したとしても不思議ではないと思う。

ともかく、其角十六歳の延宝四年当時、木下順庵（一六九八年没）の木門、林家の鷲峰・鳳岡（一七三二年没）、京都古義堂の伊藤仁斎（一七〇五年没）、貝原益軒（一七一四年没）、新井白石（一七二五年没）、荻生徂徠（一七二八年没）ら一流の儒学者が同時代を生きて居り、其角を理解するに、論語をバックボーンとした時代の空気を知らねばならないだろう。

「円覚寺太顛和尚詩学 易伝授」とあるのは、鎌倉円覚寺一六四世住持・大顛（一六二九～一六八五）から、漢詩と易経を習ったという意味です。大顛（其角は顛と表記していますが、顛が一般的です）がどうい人物かという点から見てもよい。

大顛は美濃の生まれで、臨済宗の幻住派岫雲和尚門である。大顛が鎌倉円覚寺の百六十四世住持となったのは、其角十六歳の延宝四年二月。在世中の大顛が江戸へ来て伝授したとは考えにくいので、其角が鎌倉へ通ったか、僧坊に泊まって教えを受けたかしたのだろう。「鎌倉を生きて出でむ初松魚」の芭蕉の句があるように、日本橋・鎌倉間はそれほど遠い距離ではないと思うが、日帰りという訳にはいかない。

「詩字 易伝授」の背景に、其角が参禅したという記録は無い。しかし、大顛ほどの禅者に接して其角の内面に何も起こらなかったとは考え難く、事実、其角編『新山家』に「予が手を牽きて、鼓うち舞はしめたまふよりぞ、万たふとき御事を耳にふれ侍る」と、大顛を偲んで記している言い回しは意味深である。

大顛に禅書はないが、漢詩作法書『四六文章図』がある。想像にはなるが、其角が会った大顛は座禅修行は遣り尽くしてしまい、最早漢詩に遊ぶが如き禅であったのではなかったのかと思う。同じ臨済僧でも、芭蕉が参禅した仏頂禅師（臨済宗妙心寺派雲巖寺で修行）とは異なっていたのではないか。

ところで「易伝授」について。漢方に於いて医と易は世界観を同じくしているのだから、家業の医を継ごうという其角が、大顛に易を習うという構図はおかしな事ではない。が、どうもこれは余技として其角に伝授したという意味では無いだろうか。其角の号は易の六十四卦中の三十五番目「火地晋」と呼ばれ

る卦の上文「晋其角」そのかくにすすむから採ったもの。この卦を其角が引いたのかどうかは不明だが、晋を漢字一字姓にすれば文人らしい号になるし、火地晋は出世運である。「其の角に晋む」の「角」とは、其角にとつて、俳諧の「奇」風雅の「狂」の頂きを極めるの意になったのだから、大顛の易眼に迷いはなかったのだと思う。

それにしても大顛はじめ一流の諸家に其角をつかせたのは、父東順の計らいであつたらう。「言の葉を背戸にも門にも植置ていつれ役にはたちつてとかな」とは、たいへんな教養を付けさせたものだ。

東順（一六二二年～一六九三年）は、藩医として近江膳所藩江戸藩邸に仕え、和歌・俳諧は貞門立圃系の由良正春門である。松永貞徳に始まる貞門俳諧の空気は、東順を通して其角にも伝わっていたであろう。

芭蕉は追悼文「東順伝」に「老人東順は榎氏にして、その祖父は江州堅田の農士竹氏と称す。榎氏といふものは、晋子が母かたによるものならし」と書いている。即ち、竹下東順が婚姻して榎氏となったとの意味だろうから、榎氏は榎下、榎本、榎木等の略称になるので、其角の姓も、宝井を名告るまでは榎下（榎本）其角で通っていたのだろう。

※この稿の続きは、ブログ「二上俳諧塾データ」の「創刊号補足」をご覧ください。 <http://kitfuzablog.fc2.com/>

【俳諧試論——第一回・非自他場の勧め】

連句でも俳句でも、実作を続けていますと様々な疑問が湧いて来るものです。こうした文芸上の疑問に答えるべく、興に任せて書いていこうと思います。

これまでに指導の必要から、これから連句を始められる方、俳句を始めて間もない方を対象に『俳句通信講座』『十二句連句ハンドブック』を縁ある方にお配りして来ました。いずれも簡易なパンフレット版ですが、いま残部が少なくなりましたので、これを一つに統合し、新たに取捨加筆して『二上俳諧塾「連句俳句」実作の手解き』と題して、電子書籍版を刊行しようと思集を始めさせていただきます。実作を始めて誰でもぶつかかる問題については電子書籍版をご覧頂き、少しつつこんだテーマについてはこちら『詩あきんど』号に「俳諧試論」の題で書き、ブログ「二上俳諧塾」に補足を載せません。どちらも併せてお読みください。

◎非自他場の勧め

付けの一句毎に、自の句、他の句、自他半の句、場の句の四つの区分を記しながら実作されている連句作家に連句会で同席することがあります。打越を避ける為に「自他場」を気にされて居るのですが、この問題について管見を述べておきます。

先ず、次の小澤實氏捌「秋風やの巻」を参考に見てみましょう。

半歌仙「秋風や」の巻

〈初折の表〉

発句秋	自	秋風や寄れば柱もわれに寄り	鷹羽	狩行
脇句秋	自	新涼の月差せる膝の上へ	小澤	實
第三秋	場	下り築白々に水音高まりて	片山由美子	
四・雑	場	不意に家鴨の立ち止まりたる	池田	澄子
五・雑	他	大いなる洋犬を連れ来たる人	神野	紗希
折端冬	自	芽キャベツ盛りて玻璃の曇りぬ	紗	
〈初折の裏〉				
折立冬	場	消印の消えあるクリスマスカード	由	
二・雑	他	冷ますともなく頬に手を当て	狩	
三・雑	他	追ふ女駅のホームの尽きるまで	澄	
四・雑	場	テレビ画面に地震速報	澄	
五・雑	自	みやげとて五輪人形もらひたる	由	
六・雑	自	出船入船笛で聞き分け	狩	
月・夏	場	天窓を月の過ぎゆく避暑館	由	
八・夏	場	昆虫図鑑紙魚走りゆく	紗	
九・雑	他	指折りて鷹羽狩行し苦吟せる	澄	
十・雑	自	わが家系には頭痛肩凝り	由	
花・春	場	狭庭なれど粉ふかたなき花浄土	紗	
折端春	場	巢立鳥てふ形して翔け	狩	

平成二十年十月三十一日発行『句会の楽しみ』角川学芸出版

小澤氏は「連句の楽しみ」(『句会の楽しみ』カドカワムック287)の記事の中で「自他場は三分の理があればいい」との東明雅氏の言葉を紹介しておりますので、自他場の問題点を多少理解されているものと思いますが、「秋風や」の巻は上記のように自他場を一句毎に附しています。自・自、他・他、場・場になるような打越は一句もありません。

さて、連句で付けようとするとき、打越句に「人情の有る無し」を見定めて、人情句が二句三句続くときに「自他を分かつ」という事があります。つまり、人情自↓人情自↓の後に人情自を付けると、三句絡みと言って、三句とも同じ人物のシーンと受け取られる展開になってしまいますので、↓人情他(別人物)を向かわせることがあります。

しかし、問題は一句は自の句とも他の句とも取れるのです。

例えば裏二句目の「冷ますともなく頬に手を当て」を他の句と区分していますが、自の句と取っても良いでしょう。他とされたのは、打越「芽キャベツ盛りて玻璃の曇りぬ」を自としたので「冷ますともなく頬に手を当て」を他と区分したのではないでしょう。つまり、まったく区分の為の区分に過ぎないのです。予め自とか他とか定めてしまつては、詩的想起よりも、自他場の区分を優先させるといふ本末転倒が起きてしまうのです。後の自由な展開を阻害して仕舞わないでしょうか。

例えば、自他場の立場で巻けば場と場の打越はあり得ないこ

とになるでしょう。仮に一巻に場と場の打越があつて、それを瑕として理解するとしたら、連句の詩的ダイナミックスが失われることにならないでしょうか。

次の『炭俵』俳諧秋之部に載る両吟歌仙を見てみましょう。

発句冬 場 秋の空尾上の杉に離れたり 宝井其角

脇句冬 場 おくれて一羽海わたる鷹 小泉孤屋

第三秋 他 朝霧に日備揃る貝吹て 同

四・雑 場 月の隠るゝ四扉の門 其角

五・雑 他 祖父が手の火桶も落すばかり也 同

折端冬(場) つたひ道には丸太ころばす 孤屋

脇句と四句目が場と場の打越、さらに、四句目と六句目も(「ころばす」を人が転ばしたと取れば「他」になります)が、丸太が転がっている景と取れば「場」になりますので、場と場の打越とも取れます。

「おくれて一羽海わたる鷹／朝霧に日備揃る貝吹て」は、海辺の情景。「朝霧に日備揃る貝吹て／月の隠るゝ四扉の門」は城門の聳える情景。あきらかに異なった場と場のシーンです。単に場と場だから打越と考えるのは如何なものでしょうか。

※この稿の続きは、ブログ「二上俳諧塾データ」の「創刊号補足」をご覧ください。 <http://kifuuzablog.fc2.com/>

〈其角自筆年譜〉

寛文丑 馬ならはいかほとはねんうしのとしさてもはねたり寛文元年

七月十七日 母霊夢 人目には過ると見えてうろくつの数しら波の宝まふくる

七夜暁 住吉の松を秋風吹からに声うちそふる沖津白波

寛文九酉 九月二十二日暁 東順霊夢 言のはをせとも門にも植置ていつれやくにはたちつてとかな

十歳入学 大円寺

十四歳 於堀江町 本草綱目写 修治 主治 発明

十五歳 内経素本 易経素本写

蒲生五郎兵衛需にて伊勢物語書之 右表紙出来本多下野守殿へ献之 右之褒美として刀 申請候

十六歳 草刈三越講筵

服部平助講述

円覚寺太巖和尚詩学 易伝授

十七 桃青二十歌仙

十八延宝牛 発句合 杉風五十句合作

秋洪水

二十延宝申 次韻 信徳七百五十句二対ス

辛酉

壬戌 冬 朝鮮来聘

天和 亥 みなし栗 於芝金地院前

貞享甲子 於京 蠹集

丙寅 新山家 木賀の記

丁卯 続みなしくり 撰之

四月八日 妙務尼卒五十七歳

元禄元 上京 季吟亭講歌書

十一月二十二日 宗隆尼卒於堅田葬八十四

元禄三庚午 花つみ二卷一夏百句 撰之

四辛未

雑談集二卷 撰之

五壬申

六癸酉 八月二十九日 東順卒行年七十二歳 萩の露 撰之

七甲戌 句兄弟三卷 撰之 上京

十月十二日 芭蕉卒五十二 枯尾花 撰之 粟津義仲寺 葬之

九丙子

庭竈牛も雑煮をすはりけり

十丁丑 うらわかは二卷 撰之

十一戊寅 十二月

寛文 延宝九 天和四 貞享五

虚栗 蠹集 続みなし栗 新山家 花摘上下 非人入句 雑談集

句兄弟上中下 枯尾華 わかは合 末若葉上下 三上吟跋の事

元禄十三 十月

三上吟

元禄十四 六月

焦尾琴

右其角翁書捨置レシヲ模シテ爰ニ出ス

此外類柑子一集上中下アリ年紀ニモレタルヲ以テ記之 淡々 撰

「自筆年譜」についての疑問点。

◎田中善信著『宝井其角』（新典社、二〇〇〇年）「其角が書いたとは考えられない。私はこれは偽物だと考えている・・・ただし私は、ここに書かれていることが全部でたらめだとは考えていない。中には抛るべき資料があったと思わせる記事もある。『其角十七回』には作り事が多い。この「自筆年譜」も編者淡々が手元の資料を利用して捏造したものだとは私は考えている」

◎今泉準一著『宝井其角全集年譜篇』（勉誠社、平成六年）「淡々の編になる『其角一周忌』『其角十七回』『三十三回』の其角追善集は、それぞれに其角資料として参考になるものが多いが、疑義の生じる記載もある。とくにこれは『三十三回』に多い。しかし、ここで『自筆年譜』と仮称する其角自筆の一連の記載は事実このようなものが存在したと考えられ、またこの件に関するかぎり事実として信頼してよいと思われる・・・其角自身が覚え書きに、文字通り、書き捨て置いたものにふさわしい書きぶりである」

◎二上の疑問。この「自筆年譜」に其角編『いつを昔』が載っていない。意図的に外したか単に失念したのかのどちらかになるが、乾裕幸『いつを昔の成立』（『俳文芸の研究』角川書店）を読んで理由は分からない。

詩あきんど集

二上貴夫・選評（到着順）

横浜市 矢萩道俠

薬玉や詰め込み過ぎて散るも華

時の日や点滴追う目窓に星

デモ盛り響け雷鳴夜は呑み

新卒や愚痴る同期に青時雨

◎遠い日の『夏びあ』を手に独り酒

無理しても昼寝をしても来る未来

幾千の昨日の果ての晩夏光

※薬玉は端午の節供の飾り玉。時の日は六月十日。毎金曜日の脱原発デモ。『夏びあ』で検索するのは、花火カレンダーもあるが夜景スポットも、でもそれは遠い日の出来事。

秦野市 近藤千恵

紫の布はりつめて鉄線花

ほんと馬鹿飛ばない蠅に眩いて

パラソルの午後貴婦人と乳母車

水羊羹楊枝で切ってはんぶんこ

ソーダ水儂き泡を了わらせて

◎かくれんぼいのこづちつけ見ていたり

※俳句は「つぶやきの詩」。眩くことで人は自身を確認しているのだから。迷いの思いがそのまま言葉になってしまふ。傍観的迷いが「いのこづちつけ見ていたり」にも顕れている。

秦野市 竹村左京

にんげんにすればいいやつかたつむり

目ばかりの疎水の鮎（こり）をすくいけり

◎スリツバの脱ぎすての向き春日ざし

さまざまな記憶の地図や桜ちる

ビー玉の音のかさなり春嵐

たつぷりと水ふくみけり春豆腐

※「スリツバの脱ぎすての向き」の措辞に、さり気なく作者が登場して来ます。自我を撓めて、無造作の風を粧わせようしているのですが、まったく嫌らしさを感じさせません。

日野市 熊沢初江

卯波寄す砂丘となりし生家跡

ありがとこの言葉の多し栗の花

鮎釣りの時計の刻むゆるき音

ひまわりの中の看板髪切屋

夏草や廃線辿り着く故郷

馬繋ぐ峠の茶房木曾薄曇

※生家跡には津波を思うし、馬繋ぐ峠の茶房には、平成よりも前の昭和の初期を思う。とすると、この俳句は非在を詠んでい

るようだが、しかしながら、この景は作者には実景なのだ。

秦野市 池原由佳利

うちとけて夜釣り舟なり人とまた

風鈴のかをるお大師下駄の音

茄子南瓜煮こみ冷やせば旨まし

校庭の子供みつめる額の花

蔓の中歌う白髪のお金魚

※西新井大師や川崎大師へ連れ添う人の下駄の音、夜釣り、風鈴、夏野菜、額の花、金魚売り…。夏は炎暑の昼も夜も、如何に愉しくやり過ごすかだが、やっぱり夏は夏づくしがいい。

伊勢原市 荻原浅風

夏露の鴨立庵に靴を脱ぎ

鮎跳ねて男はバカとなりにけり

両三軒揃ってハーフ盆供養

甚平に下駄で四辺のぶらりかな

コンビニに隣の人も冷奴

※鮎釣り人ならずとも女は平生、男をバカと思っているわけで、甚平にぶらりと冷奴を買いに行つて見ると、近所にも隣りにもいろんな人がいる訳で、世の中は昔と違つと気づかされる。

伊勢原市 清水麗風

ごきぶり奴けふも亦々打ち損じ

薄衣を纏つた人の凜と行く

炎天を逃れた旅も終わりけり

※炎天を逃れた旅は海外であるうか、沖縄や国内への小旅行であるうか。帰宅して思うのは、まだ暑さはつづき、つらい季節は過ぎてくれない。非日常と日常とが詠まれていて面白い。

秦野市 中澤柚果

ふと見れば若布拾ひの腰の数

石楠花やほんのひととき回り道

別れしもポツケにのこる枇杷の種

竿撓みはやる鮎釣り相模川

柚子咲いて少し明るき寺の路

ひっそりとざくろの花や鬼子母神

※作者は、歩こう会などに属していて、名所やいろいろいる公園などへ出かけるのだろう。天気予報も気になるが、その訪れた場所が想い出の地が変わるのは、懐かしくも寂しい時もある。

秦野市 穂坂良文

凧揚げる子ら天真に杉育つ

一望に雲遊ばせて早苗かな

一望の青田の果てに鷺一羽

◎一人立つ後には老いの日向ぼこ

夏木立老いの二人の憩いかな

老いの背に朝日がまるく秋彼岸

遠山が尾根を抱きて眠りおり

※老いをテーマにした句が目立つ。いつから老いを意識し出すかは人それぞれだろうが、病を得て、もう新しい事へ向かうのは難しいと感じた時は、尚更であろう。

伊勢原市 中尾美琳

モノクロの世界に溢る花吹雪

耳たぶにピアスのあとや遠花火

幽霊も見知りし顔や夏芝居

白玉の浮かびくる間の思案かな

残り蚊の白き襖に力尽き

※モノクロの世界は演劇の舞台装置で、幽霊は演劇の中での役なのだと思う。作者は虚実の虚を俳句作法に用いているのではなく、それなりに実写しようとしている。

伊勢原市 浅井碧子

目の手術に向かう道の辺蛇莓

青風体内めぐる造影剤

老人の供は老犬青田風

◎コーヒーに話のつづき大夕立

闇に目の慣れし足もと草蚩

※手足といった運動機能、目や耳といった感覚器官が衰えることは誰にもあるのだが、だいたい徐々に来て、ある日突然、限界になる。そうなる前から反省して気をつけていてもそうなる。

秦野市 加藤風純

陽盛りを木陰に目一つ潜み見る

下駄の緒に鬼灯の朱滲む宵

蝸に引きもどされし父の顔

振り向けば胸刺すばかり墓参り

草いきれ蟻の這いずる井戸の縁

暑さよりなお赤々とカンナ束

※俳句的作法と現代詩的作法は大抵バッティングしてしまうので、どちらにも良い顔を向けて五七五を書こうとすると失敗する。何度かのミスからコツを掴む外はない。

伊勢原市 細谷朋々

子ども等の育つ早さや夏休み

どのひとも暑い暑いと集いけり

夏夕べさんぼの犬ものらくらと

月見草ゆれて山河のかすみたり

青き空花なんばんのあそびたり

草いきれ皆一心に育ちけり

※作者にとって俳句は、自己表出というよりも周りとの調和を確認するものなのであるうか。夏休みには子どもが居て、夏夕べには飼犬がいる。

秦野市 和田波流

火櫛のうかぶ備前に丁字花

じゅんさいの水辺に力ヌーすべりゆく

嘴跡ののこる塩焼鮎つまし

かなへびの尾を踏みし庭朝焼けて

樟脳船鼻腔にのこる夏まつり

伏してなお草を引きたし夏の影

※火襷は緋襷とも書く。生地同士がくっつかないように藁を巻き、藁は燃えて、藁に含まれるアルカリ分が生地に色を残す。

藁の巻き方を変えることで、様々に表現することができる。

秦野市 立石佳月

◎日本の高校生の更衣

爪立ててつかまる子犬日雷

住む人の又いなくなり今年竹

雲の峰巨人となつてむすび食ぶ

雲海の崩れて見えし川二本

爆音にかき乱されて浜万年青

※更衣と言えば先ず目立つのが制服であるう。高校生にしても中学生もスカートの丈はギリギリまで短く折り込んで穿く。普通の丈でよいと思うが、イジメの対象になるのは誰しも怖い。

熱海市 山ノ内リエ

花吹雪ぐるぐるぐるる私かな

野球着の生の力の汗くささ

◎甲子園最期の夏の千羽鶴

一球に消え去りし夢夏の空

泣き疲れ水羊羹をすすつてる

※負けたチームが勝ったチームに、自分たちの分もがんばって甲子園に行ってくださいと、思いを託す千羽鶴がベンチに飾られている。千羽鶴はいつも悲しい。

日光市 北山建穂

油照りして僧坊の飯の白

疵跡の残るベンチや遠花火

針の無き柱時計や遠花火

俤や鼻腔に残る海鞘の味

熱帯夜杉にもありし仮導管

※油照りは、大きな寺院での典座職が米を研ぐ姿を想像する。疵跡の残るベンチは、津波の押し寄せた疵であるうか。仮導管はシダ植物・裸子植物にある水を吸い上げる通路。

秦野市 二上貴夫

桜桃忌名はいつまでもうら悲し

汗引いて微かな匂い繭のやつ

どこにでも居さうな同氏日向水

暗くなる港に揚がる花火かな

海の上を昇りし月や揚花火

体温の冷えぬ唇を飛ぶ蛭

夏風邪やお手柔らかに癒しあれ

夏風邪やティッシュ一箱では癒えぬ

死蝨ののんどを照らし逃げてゆく

肺の水のめとやたれも飲みやせん

■八月一日夕切で十句を送って頂き、遅着分は掲載できませんでした。改めて、次号（十月一日夕切）へ投句ください。

■俳句で大切なことは何ですか？との質問に「口遊める五・七・五にすること」ですと答えています。日本語は一言一言が数えられる音数律になっており、ともかく五七五にすれば詩になるのです。

今号の投句に「西瓜一つたらいに浮かぶ我顔もまた」という句がありました。六七七ですね。上五字余りですが、この句の場合は耳障りにはなっていないませんが、下七のリズムが良くありません。「西瓜一つたらいに浮かぶ我もまた」「西瓜一つたらいに浮かぶ我顔も」と、先ず、心地よい五七五にしましょう。

更に、俳句ですから自己表現といつても、俳味という表現に近づきましょう。「俳味とは」を説明するのは容易ではありませんが、「自我を撓める」とか「自性的な錯覚から覚める」とか、そういう境地を表現にする事をいうのです。つまり、自分にとってはどんなに深刻な事であっても、身内でもない他人にとつてはいつでも良いことです。もしも当事者性を他者が共有出来るとしたら、俳味にまで昇華されている表現に於いてなのです。

「西瓜一つ」の句は「我顔もまた」では、事実を少しも離れていません。言葉が事実から離れて、象徴性を持った含みのある

詩の言葉に変わっていかなくて俳味は出て来ません。仮に「西瓜一つ盥に浮かぶ手つきかな」としてみましょうか。「手つき」は方便、活計のことですが、こう表現することで「西瓜」も「盥」も或る含みを持った象徴としての俳句の言葉に変わります。

■もう一句、今号へ投句頂いた句で「ひんやりとひとり味う水羊羹」というのがありました。一応「口遊める五・七・五にする」のハードルはクリアしています。しかし、口遊むには、もう一工夫欲しいのです。どこか音の流れに忠実に、音の重なりを感じて欲しいのです。

日本語の四十八の声音には意味があり、クオリアというものがあります。クオリアとは、心の中で物を思うときに誰しも共通に抱く独特の質感というべきモノです。茂木健一郎氏は『クオリア・マニフェスト』で「クオリアとは、『赤の赤らしさ』や、『パイオリンの音の質感』、『薔薇の花の香り』、『水の冷たさ』、『ミルクの味』のような、私たちの感覚を構成する独特の質感のことである。」と説明されています。

「水羊羹」の句に戻りますが、上五「ひんやりと」の「ひ」の質感に心が支配されます。「ひ」の質感は「ひとり」に重なりますが、その後の「味わう」という音に引っ掛かるのです。ここは「あ」音を消したいし、序でに俳味との関連でいえば、一人という自性も消したいのです。「ひいやりと皿にひと切れ水羊羹」としたら質感が出ると思います。

【本誌の題名】

酒債尋常往処有 人生七十古來稀

詩あきんど年を貪ル酒債哉 其角（『みなし栗』より）

冬湖日暮て駕馬二鯉 芭蕉

干鈍ぎ夷ホコに関をゆるすらん

三線・人の鬼を泣しむ

月は袖かうるき睡る膝のうへに

鳴の羽しばる夜深き也

本誌の題名は「詩あきんど年を貪ル酒債哉」から頂きました。

この発句は、天和三年刊行の俳諧集『みなし栗』に、芭蕉其角両吟歌仙「詩あきんど巻」として載っています。「しゅさいじんじょういくところにある」「じんせいしちじゅうこうらいまれなり」の前書は、杜甫の詩「曲江」の一行で、酒代の借金は尋常なことで、わたくしが行く処どこにでもある。七十までも長生きする者は稀なのだからまゝ許されたいの意か。江戸の俳諧師（詩あきんど）に住宅ローンの返済や国民健康保険税の滞納はなくとも、年の暮れ、借金取りはやって来ます。胸中より湧き出る思いを、生きている証しと許りに吐き出したのでしよう。

【「上賣夫ブロフィール」】

一九四七年佐賀県生まれ。宝井其角研究者。俳諧師。「其角座

継承會」員。「二上俳諧塾」「みづすまし俳句会」「日野武蔵野連」主宰。二〇〇六年、其角三百回を加藤郁乎氏らと共に、江戸東京博物館及び其角の墓のある神奈川県伊勢原市「上行寺」にて催す。この縁で半世紀余り途絶えていた上行寺での「晋翁忌」を、毎年四月第一土曜日と定め復興し、現在「晋翁忌」世話人。

一九八八年、古書店で見つけた勝峯晋風編『其角全集』によって、日本固有の「俳諧文芸」の存在を知り、連句、俳句を始める。連句は岡本春人氏の「十二調」の継承者岡本星女先生に、橋間石の「非懐紙」を継ぐ澁谷道先生に習い影響を受ける。

俳句は一九九三〜一九九六年『草の花』（藤田あけ鳥主宰）へ、一九九六〜二〇〇五年『紫微』（澁谷道主宰）へ、二〇〇九年よりは須藤徹主宰『ぶるうまりん』へ投句。

一九八八〜二〇〇一年、連句形式自由による「連句文芸賞」を提唱して平成連句競詠会を設立し代表を務める。二〇〇一年、編著『わいわい連句遊び―連句文芸賞への誘い』（東京文獻センター）を刊行。二〇〇六年、句集『焔天上巻』（理想書店）。其角研究は一九九五年、連句誌『れぎおん』第十号〜第十八号に『其角点描』を八回連載。現在、『ぶるうまりん』誌に「其角論」を連載中。

中天に停まるものあり春の足

凧をながめてゐたる轆かな

俳人の竜雨の忌なり蕪煮る

会 員 案 内

入塾金	喜捨。 年会費五千元。俳句は偶数月の一日のみ切で、所定の用紙に十句(当季雑詠、無季可)を書いてご投句ください。連句は折々の不定期な座の外に、非公開のSNS、スカイプのグループ会議を使って実作します。俳句・連句共に電子書籍版『二上俳諧塾テキスト』を参考に実作して下さい。
購読会員	入塾金ナシ。年会費三千元。隔月刊『詩あきんど』を郵送します。メールアドレスのある方は、二上俳諧塾メルマガに登録致しますのでご連絡下さい。 不定期で公開の研究会を開きます。参加費のみでどなたでも受講可。「其角十講」や「連句俳句の実作会」「俳味についての研究会」を開きます。
公開講座	

(連絡住所)〒257・0024 神奈川県秦野市名古木^{ながぬき}一七の一

(電話FAX) 0463・82・6315

(メール) futakami-kiifu@kikaku.boop.jp

(ウェブ kiifu's 俳諧) <http://kikaku.boop.jp/kiifu/>

(ブログ 二上俳諧塾ノート) <http://kiifuza.blog.fc2.com/>

(年会費納入) 郵便振込口座/00240091 45292

ゆうちょ銀行/〇二九店(029) 当座00445292

加入者名/ドームイグノラムス

二上俳諧塾公開講座のお知らせ

◎其角十講を学ぼう

日時/十月二十一日(日) 午後一時受付〜午後四時半

会場/熱海市「起雲閣」二階ギャラリー

会費/千五百円(定員五十名)

予約/メール、ファクスなどでご連絡下さい。

*午後一時〜上古代語四八音のクオリア。午後三時〜其角十講(富永半次郎の其角論について)。

二上俳諧塾実作会

◎俳句を作ろう

日時/九月二十日(木) 午後一時半受付〜午後四時

会場/熱海市「起雲閣」一階雲雀の間

会費/千円(定員十名)

*俳句三句(うち兼題「月」一句)を、九月十五日までに、メールフォーム、FAXで、予め投句ください。

*投句は無料です。佳句は「FM熱海湯河原放送」の番組の中で発表致します。

◎十二句連句を巻こう

日時/九月二十二日(土) 午後一時半受付〜午後四時半

会場/日野市「新町交流センター」二階和室

会費/五百円(定員十五名。数席の座に分かれます)

*ブログ「君と巻きたい十二句連句」へ当日作品掲載。